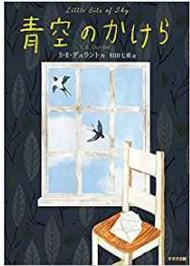


紙版 ハコブネ×ブックス vol. 54

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。



青空のかげり
Little bits of sky.
作者 S・E・デュラント
翻訳者 杉田七重
出版社 鈴木出版
発行 2016年10月
ISBN 978-4790233183



孤児であるミラとザックの姉弟は、養い親に引き取ってもらえないまま児童養護施設で古株になっていました。二人に家族を見つげようと施設の職員は努力するものの、十歳を越えたミラと九歳のザックは養子になるには難しい年齢です。そんな折、二人を引き受けても良いと年配の女性、ミス・フリーマンが申し出てくれます。小学校の校長先生だった彼女の前で、行儀良くして気に入られなくてはと緊張するミラの方、向こう見ずで問題を起こしてばかりのザック。二人を見守るミス・フリーマンもまた、ずっと独身で子どもと差し向かいで食事をしたことさえなく、二人にどう接してよいか戸惑っていました。お互いに好きになってもうらいたいと願いながらも、心の距離を縮めていくには時間がかかりすぎます。そんなもどかしい日々をミラの豊かな感性が回想します。



花になった子どもたち
The lost flower children.
作者 ジャネット・テラーライル
翻訳者 多賀京子
出版社 福音館書店
発行 2007年11月
ISBN 978-4834021776



第二次世界大戦下のロンドン。戦禍を恐れ疎開する子どもたちを尻目に、十二歳の少年ジョーゼフは、田舎からこの都会にやってきました。怒りの衝動を抑えられない問題児を彼の祖母は持て余し、知り合いの女性、ミセスFに託したのでした。ジョーゼフは、きつい顔をしたこの気難しそうな女性と打ち解けることができず、学校でもトラブルを起こしがちです。今は閉園となったミセスFが経営する動物園には、引き取り手のない牡ゴリラのアドニスが残されていました。心を閉ざし孤独を抱えるジョーゼフは、アドニスの世話をしながら、次第に親近感を抱くようになり、空襲で動物園が破壊され、ゴリラが町に放たれてしまった場合の危険を回避するために、アドニスに殺処分する命令が下され、ミセスFはジョーゼフの苦衷を知ることになり、ある決意を抱きます。

母親が亡くなり、父親は仕事で忙しいために、オリヴィアとネリーの姉妹は夏休みにミンティとおばさんの家に預けられます。ちょっと変わった子である妹の面倒を見るのは、年をとったミンティとおばさんには難しいのではないかとオリヴィアは案じます。実際、おしつけられた二人の女の子の前に、独身で子どもを育てたことのないミンティとおばさんは呆然とします。おばさんなりに考えて、二人の世話を焼こうとするものの外的で、オリヴィアにはどうにも疎ましく思ってしまう。そんな夏のある日、おばさんがいつも手入れをしている草深い庭に埋まっていた、美しい青色の陶器のティーカップが、姉妹を不思議な世界に誘うきっかけとなります。作中物語と現実が交錯し、大人との心のかけひきが、やがて子どもたちに変化を及ぼしていく、多層で膨みのある物語です。

特集
年配の独身女性が子どもと関わることになる話



花ざかりの家の魔女 (河原潤子) あか書房 2008年

小学五年生の久美は、父親の大叔母に会いに行き、つれなくされます。小学校の先生として勤め上げ、独身のまま現在も一人暮らしをする難かしい人だからといって、その態度はどうか。とはいえず、彼女なりに心の事情があるのです。国内作品でもまた、こうした物語の魅力は発揮されています。

特集 年配の独身女性が子どもと関わることになる話



赤毛のアン L・M・モンゴメリー 村岡花子訳 講談社 2022年

年配の女性だったら皆、愛情にあふれ包容力があって子どもが大好き。そんなことはありません。子どもを前にして引いてしまったり、つい厳しい態度で接してしまったり、つい嫌いです。子どもが嫌いだからではなく、ずっと独身で子どもを育てた経験がないために、どう接していいのかわからないからです。そんな人が子どもと関わることになる時戸惑いのスパークが生じます。『赤毛のアン』のマリラのように、手のかかる子どもと向きあう年配の独身女性の心境は複雑です。魂が呼び合い心が通いあうには時間がかかります。その大いなる寛容が子どもたちに発揮されるまでのプロセスもまた味わい深い物語の愉悅なのです。



アドニスの声が聞こえる
WHEN THE SKY FALLS.
作者 フィル・アール
翻訳者 杉田七重
出版社 小学館
発行 2024年4月
ISBN 978-4092906624



第二次世界大戦下のロンドン。戦禍を恐れ疎開する子どもたちを尻目に、十二歳の少年ジョーゼフは、田舎からこの都会にやってきました。怒りの衝動を抑えられない問題児を彼の祖母は持て余し、知り合いの女性、ミセスFに託したのでした。ジョーゼフは、きつい顔をしたこの気難しそうな女性と打ち解けることができず、学校でもトラブルを起こしがちです。今は閉園となったミセスFが経営する動物園には、引き取り手のない牡ゴリラのアドニスが残されていました。心を閉ざし孤独を抱えるジョーゼフは、アドニスの世話をしながら、次第に親近感を抱くようになり、空襲で動物園が破壊され、ゴリラが町に放たれてしまった場合の危険を回避するために、アドニスに殺処分する命令が下され、ミセスFはジョーゼフの苦衷を知ることになり、ある決意を抱きます。

わたしがいどんだ戦い 1939年



The War That Saved My Life.
作者 キンバリー・ブルベーカー・ブラッドリー
翻訳者 大作道子
出版社 評論社
発行 2017年8月
ISBN 978-4566024540



内反足という障がいがあるために、普通に歩くことができず、家の中を歩いて生活している少女エイダ。父親はおらず、母親から疎まれ、学校にも行かせてもらえないまま窓から外を見ただけが愉しみだったエイダはロンドンから田舎に疎開させられるようになった。一九三九年です。母親の元を離れたエイダは、弟とともにロンドンの南東部にある田園地帯、ケント州にたどり着きます。二人を預かってくれたのは独身の中年女性スーザンです。学識や資産はあるけれど、地域から浮いた存在であるスーザンは、子どもを預かる気などなかったのに二人を押しつけられて困惑します。虐待されて育ったエイダは素直に人に接することができず、社会的なマナーもわかりません。希望を抱けず、諦めてばかりのエイダに、迷惑だと言いつつもスーザンは次第に心を寄せていきます。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.54
2026年3月1日発行 ●発行人 きむらともお
事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト「ハコブネ×ブックス」(非営利)を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作、諸々を受賞。
お問合せはこちらから。

